

# 社会的な見方・考え方を育成する社会科授業論の革新

—21世紀の学校教育における社会科の役割—

Innovation of the Methodology of Social Studies to Promote  
Children's Social Cognition: New Roles of Social Studies  
in School Education for Tomorrow

小 原 友 行

(広 島 大 学)

## 1 はじめに

20世紀の学校教育は、社会科の時代でもあったといえるのではなかろうか。「Social Studies (社会科)」という名称の新教科がアメリカ合衆国で誕生したのは、19世紀末から20世紀初めの世紀転換期における、工業化・都市化の進展と移民の急増という急激な社会の変化、デューイを代表とする進歩主義的教育学の実践理論の発展、そして社会諸科学の発達といった時代的背景の下で、望ましいアメリカ市民の育成という歴史的課題に応えるためであった。

わが国で社会科が誕生したのは1947 (昭和22) 年のことであるが、それは、アメリカ合衆国の場合と同様に、戦後の民主的社会を担う実践人の育成という歴史的課題に応えるためであった。社会科は、貧困の克服や社会の民主化の実現といった課題に直面していた戦後の混乱期の中で、子どもたちに問題を解決させることによって民主的社会を担う市民 (公民) を育成しようとする、新教育の中心的教科として位置づけられていた。

このような社会科成立の経緯からもわかるように、20世紀の社会科教育の役割は、民主的・平和的な国家・社会の形成者に必要な社会的な見方・考え方を育成することであったと考えられる。その後、このような見方・考え方を育成する主要な社会科授業論として、「問題解決型授業論」「理解型授業論」「説明型授業論」「意思決定型授業論」などさまざまなものが提案され、実践が積み重ねられてきた。<sup>1)</sup>

では、国際化、情報化、少子・高齢化、価値多様化、地球環境の悪化といった社会の急激な変化

や課題に主体的に対処して生きていくために、一人一人が合理的な社会的判断を行い、適切な社会的行為を選択・決定していくことが求められる21世紀の学校教育において、社会科の役割はどのようなものとなるのであろうか。どのような社会的な見方・考え方を育成していくことが必要となるのであろうか。20世紀の主要な社会科授業論を踏襲するだけでよいのであろうか。

このような問題意識から、本小論では、これからの時代に求められる社会的な見方・考え方の育成という観点から、以下の3点について考察を行っていきたい。

- ① 社会科の出発点における社会的な見方・考え方とはどのようなものであったのか。
- ② 20世紀の社会科の主要な授業論における社会的な見方・考え方の育成には、今日的な視点からみてどのような課題があるのか。
- ③ 課題を克服するために、社会的な見方・考え方を育成する社会科授業論をどのように革新していくことが必要となるのか。

## 2 社会科で育成する社会的な見方・考え方

社会科は、「社会認識を通して市民 (公民) 的資質を育成する」教科である。したがって、社会的な見方・考え方の育成は、社会科学習のねらいであると考えられる。1989 (平成元) 年版の「小学校指導書社会編」では、「公民的資質の基礎を養うためには、単なる知識の伝授ではなく、児童一人一人が社会生活についての理解をもとに社会的なものの見方や考え方をもち、これからの社会において主体的に生きていくことができ

る力を育てるようにする必要がある。」と述べられている。<sup>2)</sup>

わが国で最初に社会的な見方・考え方を目標として明示しているのは、1951（昭和26）年版「小学校学習指導要領社会科編（試案）」である。

その「まえがき」においては、「そもそも社会科の目的は、児童の、人間生活社会生活に対する見方考え方を確立させることにある。1年生には1年生なりの、6年生には6年生なりの人間観・社会観をもたせなくてはならない。」と述べられている。そして、「各学年の目標として掲げられたものは、各学年の児童にふさわしい人間生活社会生活の見方考え方、すなわち人間観・社会観の要素とでもいうべきものである。」とされている。また、各学年の目標は、「物の見方考え方である以上、これは単なる知的な理解事項でなく、態度の根底となるものであり、見方によっては能力ともいえるものである。」としている。<sup>3)</sup>

社会的な見方・考え方の中身と考えられる各学年の目標のうち、第3・6学年の目標を紹介すると、表1のようになっている。<sup>4)</sup>

表1から読み取れるように、1951年版「小学校学習指導要領社会科編（試案）」において育成が目指される社会的な見方・考え方には、「～なので、～である」という事実的な見方・考え方と、「～なので、～すべきである」という価値的な見方・考え方の両面が含まれている。前者は、「社会がわかる」ためのものであり、後者は、「社会に生きる」ためのものである。

なお、前者の事実的な見方・考え方には、「人間は～のために、～をする」という人間生活や社会生活についての理解的な見方・考え方と、「社会的事象は～なので、～である」という説明的な見方・考え方の2つからなりたっている。また、後者の価値的な見方・考え方においては、「～なので」にあたる大前提となっているものは、民主主義と平和主義であることがわかる。

### 3 社会的な見方・考え方を育成する社会科授業論の現状と課題

(1) 事実的な見方・考え方を育成する授業論  
社会的な見方・考え方のうち、事実的な見方・

考え方の育成を重視した主要な社会科授業論としては、「理解型授業論」と「説明型授業論」の2つがある。

前者の「理解型授業論」は、社会を生み出した「人間」の行為を軸とする見方・考え方を育成することをねらいとした授業論であり、1955（昭和30）年版以降の小学校学習指導要領社会科編に典型的に貫かれているものである。

そこでは、人間（個人・集団・組織体）の問題解決的行為とその結果の事実を体験・追体験・理解させることを通して、次のような社会生活に関する見方・考え方の育成が目指される。

- ① 人間がどのような問題場面でどのような行為を行ったのかの事実についての理解。
- ② それは目的（願い）を実現するための手段（工夫・努力・協力）として行われた行為であったというように、行為を目的と手段の関係から説明する目的論的理解。
- ③ 行為の結果として、人々の生活は維持・向上・発展したという、行為の社会的意味についての理解。
- ④ 行為はその後の社会の人々の生活の維持・向上・発展にも役立っているという、行為の歴史的意義についての理解。
- ⑤ こうした人間の行為によって、各地域、各時代、各社会領域は他とは異なるすぐれた個性（特色）を生み出しているという特色についての理解。

後者の「説明型授業論」は、人間の行為を規定する「社会」を軸とする見方・考え方を育成することをねらいとした授業論であり、アメリカ新社会科に典型的にみられるが、その考え方を参考にして、わが国では森分孝治氏などによって提唱されている。<sup>5)</sup>

そこでは、社会的事象を科学的に説明させることによって、次のような事象を説明し解釈する理論である「社会認識体制」としての見方・考え方の育成が目指される。

- ① 社会的事象がなぜ生じたのかの原因究明を行う見方・考え方。
- ② 社会的事象がどうなるかを予測する見方・考え方。

③ 社会的事象を説明し解釈するための科学的知識である概念・法則・理論としての見方・考え方。

(2) 価値的な見方・考え方を育成する授業論  
価値的な見方・考え方を育成する主要な社会科学授業論としては、「問題解決型授業論」と「意思決定型授業論」の2つがある。

表1 1951年版「小学校学習指導要領社会科編（試案）」の第3・6学年の目標

第3学年の目標
<p>◇人々が生計を立てるために行う仕事はその土地の地理的条件に影響されることが多い。</p> <p>◇自然的条件はわたくしたちの衣食住の様式と深い関係をもっている。</p> <p>◇わたくしたちが衣食住に使う物は土地によって大いに異なる。</p> <p>◇異なった土地に生活する人々はその産物を交換し合う。</p> <p>◇道路や交通機関は一つの土地と他の土地との相互依存を増進する。</p> <p>◇道路や交通機関の発達は土地の人々の生活のありさまにいろいろな変化を与える。</p> <p>◇町の人と村の人はその生活の種々の面で依存し合っている。</p> <p>◇町や村は住みよい条件の整っているところに発達しやすい。</p> <p>○町や村にはいろいろな公共施設があって人々の生活を便利にしている。</p> <p>○人々はみんなが健康で安全な生活をするためにさまざまな協力をしている。</p> <p>○人々は住んでいる土地に応じて厚生慰安の施設のくふうをしている。</p> <p>●人々が共同生活を営むにはいろいろなきまりが必要である。</p> <p>◇種々の職業は互に関係をもっている。</p> <p>○動植物を保護し育成すれば生活を向上させることができる。</p> <p>○動植物がわたくしたちの日常生活に役だつ面は非常に広い。</p> <p>●役にたつ動植物は今後いっそう愛護していかななくてはならない。</p> <p>●わたくしたちは互に考え方が違っている場合には、それを喜んで検討し受け入れることによって、いっそうよい考えを生み出すように努めるべきである。</p> <p>○わたくしたちはみな、何か人のためになる長所をもっているものである。</p> <p>○人はみなその長所を生かすことによって他の人々の役にたつことができる。</p>
第6学年の目標
<p>◇通信、報道機関の発達は、わたくしたちの意見の交換や、知識を豊かにすることを容易にした。</p> <p>◇通信、報道機関は、人間生活のいろいろな面に非常に役だつ。</p> <p>◇通信、報道機関の発達は、わたくしたちの相互の理解を進めるのに役だってきた。</p> <p>○人々はみな幸福になれる権利をもっている。</p> <p>●すべての人が幸福になれるように、みんなで協力することが政治でなければならない。</p> <p>○政治上のあらゆる制度や施設の役割は、社会生活を合理化して、すべての人を幸福にすることにある。</p> <p>●社会の秩序を維持するためには、個々の人々の協力による民衆の自主的統制が必要である。</p> <p>◇昔は身分に区別があって、人々の自由な活動が妨げられていた。</p> <p>◇昔は、国の政治が一部の人の意見で行われ、一般民衆は参与できなかった。</p> <p>◇世界の国々は物的な面ばかりでなく、文化的な面でも、密接な相互依存関係にある。</p> <p>○国を異にすれば、生活の形式も異なってくるけれども、人々はやはり人間としての共通の欲求をもっている。</p> <p>●国を異にする人々も、等しく人類の一員であるから、互に尊敬し合い互に幸福を願わなければならない。</p> <p>◇戦争は人類にとって最大の不幸である。</p> <p>●わたくしたちは全力をあげて、戦争の回避に努めなければならない。</p> <p>●自由はつねに責任をとるものではない。</p> <p>●わたくしたちは絶えず自分たちの生活を改善して、合理的で意義のあるものにするように努めなければならない。</p> <p>○学問の進歩と人々の協力とに努めれば、わたくしたちの生活はますます豊かなよいものにしていくことができる。</p>

[○は事実的な見方・考え方①（理解的）、◇は事実的な見方・考え方②（説明的）、●は価値的な見方・考え方]

前者の「問題解決型授業論」は、1947・1951年版学習指導要領社会科編（試案）に基づく社会科実践や、社会科の初志をつらぬく会、日本生活教育連盟前期、昭和20年代後期の農村青年教師などによる社会科教育実践にみられるものである。<sup>6)</sup>

そこでは、子どもや社会の問題を取り上げ、それを知的・実践的に解決させることを通して、知識・理解、態度、能力が結びついた、次のような見方・考え方の育成が目指される。

- ① 問題の事実に関する見方・考え方。
- ② 問題の原因についての見方・考え方。
- ③ 問題解決の判断にかかわる見方・考え方。

後者の「意思決定型授業論」は、デューイの考え方を継承した、アメリカ合衆国におけるエンゲル、メトカーフ、オリバー、シェイバー、マシヤラス、カルトソーニス、バースなどが提唱する社会科に典型的にみられるものであり、最近ではわが国でも何人かの研究者・実践者によって取り上げられている。<sup>7)</sup>

そこでは、社会的な論争問題を取り上げ、目的・目標を達成するための最も合理的な手段・方法を考えることによって、次のような見方・考え方の育成が目指される。

- ① 論争問題の事実と原因に関する見方・考え方。
- ② 達成すべき目的・目標についての見方・考え方。
- ③ 複数存在する手段・方法（行動案）の中からより望ましいものを選択・決定し、それを根拠づける見方・考え方。

### (3) 社会科授業論の課題

以上考察してきた、わが国の主要な社会科授業論にみられる社会的な見方・考え方の育成の現状には、21世紀における社会科の役割という観点からみたとき、どのような課題が残されているのであろうか。

社会の急激な変化や課題に対して、一人一人が合理的な社会的判断を行い、適切な社会的行為を選択・決定していくために必要な社会的な見方・考え方の育成というこれからの社会科の役割という観点から考えれば、社会科授業論の課題として

は、以下の3点を指摘することができよう。

第1の課題は、社会的な見方・考え方の育成には、「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」の3つの段階の見方・考え方の育成が必要となるが、「理解型」や「説明型」では「社会がわかる」ことに重点がおかれ、「問題解決型」や「意思決定型」では「社会に生きる」に関心がおかれ、それぞれ単独の授業論だけでは、すべての段階での見方・考え方の育成が確実に行えないことである。

第2の課題は、いずれの授業論も、児童・生徒が「理解する」「説明する」「問題解決する」「意思決定する」ことによってえられる社会的事象に関する内容的（実質的）な見方・考え方の育成が中心となっており、「理解の仕方を学ぶ」「説明の仕方を学ぶ」「問題解決の仕方を学ぶ」「意思決定の仕方を学ぶ」という方法的（機能的）な見方・考え方の育成が十分に考慮されていないことである。

そして第3の課題は、いずれの授業論も、個人の中での社会的な見方・考え方の育成を重視したものであり、学級集団という社会的関係の中での相互作用を通して学ぶことによって、見方・考え方を発見・創造・転換・発展させていくという観点がないことである。<sup>8)</sup>

## 4 社会的な見方・考え方を育成する社会科授業論の革新

### (1) 社会科授業論の革新の3つの方向

前述した社会的な見方・考え方の育成に関する3つの課題を克服するためには、社会科授業論の革新をどのように行うことが必要であろうか。

課題克服の方向の第1は、「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」ために必要な社会的な見方・考え方を、統一的に育成することのできる授業論を構築することである。具体的には、「理解型」「説明型」「問題解決型」「意思決定型」の授業論を対立するものと考え、いずれか一つの授業論のみで社会科の学習を考えるのではなく、児童・生徒にとっての学習という観点から、社会の急激な変化や課題について「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」ことを学ぶ適切な



表2 社会的な見方・考え方の構成要素

	内容的な見方・考え方	方法的な見方・考え方
社会を知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●記述的…社会的事象に対して「どのように、どのような」と問い、資料によって事象の過程、構造・特色などを記述</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●情報の受信活動…自分なりの「テーマ」「キーワード」をもって情報を受信（収集・選択・活用）→観察・資料活用</li> <li>●情報の発信活動…自分で情報を生産し、情報手段を通じてそれを発信（創造・作成・発表・表現）→表現力</li> </ul>
社会がわかる	<ul style="list-style-type: none"> <li>●説明的…社会的事象に対して「なぜ、どうして」と問い、推論により事象を説明 <ul style="list-style-type: none"> <li>○目的論的説明（目的・手段の関係）</li> <li>○条件的説明（条件・結果の関係）</li> <li>○因果的説明（原因・結果の関係）</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「理解」の方法→思考力 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 事実の正確な理解…観察・資料の活用、表現</li> <li>イ 目的論的理解…体験・追体験</li> <li>ウ 社会的意味の理解…変化</li> <li>エ 歴史的意義の理解…歴史的变化、影響</li> <li>オ 個性・特色の理解…比較</li> </ul> </li> <li>●「説明」の方法→思考力 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 問題把握…「なぜ、どうして」</li> <li>イ 仮説の設定…「AだからBである」</li> <li>ウ 仮説の論理的帰結の推論…「もし仮説が正しければ、～ようなことが起こるのではないか」</li> <li>エ 資料の収集・分析…「本当にそんなことが起こっているだろうか」</li> <li>オ 仮説の検証…資料に基づいて仮説を検証</li> </ul> </li> </ul>
社会に生きる	<ul style="list-style-type: none"> <li>●判断的…社会的事象の問題場面において、「何をなすべきか」「どの解決策がより望ましいか」「もっとよい方法はないか」と問い、目的・目標を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「問題解決」の方法→判断力 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 問題に直面</li> <li>イ 問題の明確化</li> <li>ウ 問題解決の手順の計画</li> <li>エ 解決に必要な資料の収集</li> <li>オ 問題解決の見通し（仮説）</li> <li>カ 仮説を検討し解決方法に到達</li> </ul> </li> <li>●「意思決定」の方法→判断力 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 問題把握…「どうしたらよいか、どの方法がより望ましいか、もっとよい方法はないか」</li> <li>イ 達成すべき目的・目標の明確化…「達成すべき目的・目標は何か」</li> <li>ウ すべての実行可能な解決策（行動案）の提出…「こうすればよいのでは、こんな方法も」</li> <li>エ 解決策（行動案）の論理的結果の予測…「もしそのような行動を実行したらどのような結果が生じるか」</li> <li>オ 解決策の選択と根拠づけ…「どの解決策がより望ましいか」「なぜそのように判断したのか」</li> <li>カ 行動…「やってみよう」</li> </ul> </li> </ul>

学習場面で、学習者がすべての授業論の見方・考え方を獲得していくことができるようなものとして構築することが必要であろう。

第2の方向は、内容的な見方・考え方と方法的な見方・考え方の両面を育成する授業論を構築することである。換言すれば、「社会を知る学習」と「社会の知り方を学ぶ学習」、「社会がわかる学

習」と「社会のわかり方を学ぶ学習」、「社会に生きる学習」と「社会における生き方の追求の仕方を学ぶ学習」の両方を行うことができるような授業論を構築することである。具体的には、大単元の学習において、「情報を受信・発信する学習」と「情報の受信・発信の方法を学ぶ学習」、「理解する学習」と「理解の方法を学ぶ学習」、「説明す

る学習」と「説明の方法を学ぶ学習」、「問題解決する学習」と「問題解決の方法を学ぶ学習」、「意思決定する学習」と「意思決定の方法を学ぶ学習」の両方を行うことである。

第3は、学級集団という社会的関係の中での相互作用（コミュニケーション）を通して、社会的な見方・考え方を育成する授業論を構築することである。例えば、「理解型」では学級集団による人間の社会的行為の評価（意味・意義づけ）、「説明型」では集団の討論による理論の発見・探求・検証、「問題解決型」では学級集団による解決策の吟味、「意思決定型」では社会的合意を目指した決定と根拠づけの学習が必要となろう。

## (2) これからの社会科で育成する見方・考え方

これら3つの課題克服の方向性から、これからの社会科で育成する社会的な見方・考え方の構成要素を考えると、表2のようになる。

表2では、これからの社会科で育成する社会的な見方・考え方を、社会の変化や課題に対して一人一人が思考・判断を行い、合理的な社会的行為を選択・決定していくことができるために必要なものととらえている。具体的には、社会的な見方や考え方を、「内容的な見方・考え方」と「方法的な見方・考え方」の2つに分けている。

前者の「内容的な見方・考え方」としては、①「社会を知る」、②「社会がわかる」、③「社会に生きる」ために必要な、次の3つの見方・考え方が考えられる。

「社会を知る」ための見方・考え方とは、社会的事象に対して「どのように、どのような」と問い、資料から事象の過程、構造・特色などを記述する記述的なそれである。

「社会がわかる」ための見方・考え方とは、社会的事象に対して「なぜ、どうして」と問い、推論によって事象を説明（目的論的説明、条件的説明、因果的説明）する説明的なそれである。

「社会に生きる」ために必要な見方・考え方とは、社会的事象の問題場面において、「何をなすべきか、どの解決策がより望ましいか」と問い、目的を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定する判断的なそれである。

後者の「方法的な見方・考え方」としては、①「社会の知り方を学ぶ方法」、②「社会のわかり方を学ぶ方法」、③「社会における生き方の追求の仕方を学ぶ方法」の3つが考えられる。

「社会の知り方を学ぶ方法」としては、自分なりの「テーマ」「キーワード」をもって情報を受信する方法と、自分で情報を生産し、情報手段を通じてそれを発信する方法が考えられる。

「社会のわかり方を学ぶ方法」としては、「理解の方法」「説明の方法」といったわかり方を学ぶ方法が考えられる。

「社会における生き方の追求の仕方を学ぶ方法」としては、「問題解決の方法」「意思決定の方法」といった生き方の追求の仕方を学ぶ方法が考えられる。

## (3) 新しい社会科授業論の構想

### ① 「社会的課題の研究学習」

このような見方・考え方を育成する社会科授業論として、ここでは、「社会的課題の研究学習」を提唱しておきたい。

「社会的課題の研究学習」とは、教材として選択された、未来において子どもたちが解決を求められる社会の現代的な課題を、学級集団の中での子どもたちの相互作用によって研究させることを通して、前述した社会的な見方・考え方を育成することを目指した学習である。

未来において子どもたちが解決を求められる課題とは、国際化社会の進展に伴う共存・共生、情報化社会に対処する情報活用、環境問題の深刻化に対する問題解決、高齢化社会や福祉社会における主体的な生活など、社会の変化に伴って子どもたちが将来直面するであろう課題であり、一人一人が合理的な社会的判断を行い、適切な社会的行為を選択・決定していくことが求められる課題でもある。

このような「社会的課題の研究学習」を行うことによって、今日的な課題についての「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」ために必要な内容的な見方・考え方とともに、「社会の知り方を学ぶ」「社会のわかり方を学ぶ」「社会における生き方の追求の仕方を学ぶ」ために必要な方法

的な見方・考え方を育成することが可能になると考えることができよう。

## ② 「社会的課題の研究学習」の授業構成

「社会的課題の研究学習」という授業論に基づく単元の授業構成においては、次のように教材構成、授業過程の組織、学習形態・学習活動の選択を行うことが必要となる。

単元の教材構成においては、前述の社会的な見方・考え方、すなわち内容的な見方・考え方と方法的な見方・考え方の両方が、学習内容（達成目標）として取り上げられることになる。また、そのような学習内容を習得するための教材として、前述した社会の今日的な課題が取り上げられることになる。

単元の授業過程は、教材として取り上げられた社会的課題について、研究する方法（記述・説明・判断の仕方）を学ぶ学習と、実際に研究問題について研究する（記述・説明・判断する）学習の両方を行うことができるような過程として組織されることになる。具体的には、表3のような過程として組織される。

導入部では、教材として取り上げられた社会的な課題と出会い、単元全体の大きな研究問題となる知的な問題「なぜ、どうして」や、実践的な問題「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」を発見する。次に、研究問題を解決するためにはどうしたらよいかを話し合い、具体的な調べ問題の構成を行う。そして、単元全体の研究計画の立案を行う。

展開部は、研究の方法を学ぶ「展開部Ⅰ」と実際に研究を行う「展開部Ⅱ」からなる。「展開部

Ⅰ」では、社会の知り方を学ぶための「調べ方を学ぶ」学習、社会のわかり方を学ぶための「知的な問題の解決方法を学ぶ」学習、社会における生き方の追求の仕方を学ぶための「実践的な問題の解決方法を学ぶ」学習が行われる。具体的には、「情報の受信・発信の方法を学ぶ学習」、「理解の方法を学ぶ学習」、「説明の方法を学ぶ学習」、「問題解決の方法を学ぶ学習」、「意思決定の方法を学ぶ学習」のうち、この単元での研究に必要なものが取り上げられることになる。次に「展開部Ⅱ」では、学習した方法を参考にしながら、教材についての調査・研究が行われる。すなわち、「調べ問題の調査」と「調査結果の表現・発表」、それらに基づく単元全体の大きな研究問題（知的な問題と実践的問題）の解決が行われる。具体的には、教材を調査しその結果を発表するための「情報を受信・発信する学習」、知的な問題を解決するために必要な「理解する学習」と「説明する学習」、実践的な問題を解決するために必要な「問題解決する学習」と「意思決定する学習」が行われることになる。

終結部では、研究成果の総合的な表現活動や、単元全体の研究を振り返っての自己評価・相互評価の活動が行われる。また、獲得した社会的な見方・考え方を他教材へ発展・応用し、新たな問題の発見を行う。

学習形態としては、個別学習、ペア学習、グループ学習、一斉学習を、授業過程の適切な場面に取り入れることが必要となる。そして、学級の多様な集団の中での相互作用によって、子どもたち一人一人が社会的な見方・考え方を発見・創造・転

表3 「社会的課題の研究学習」の授業過程

導入部	展開部Ⅰ	展開部Ⅱ	終結部
(研究問題の発見)	(研究方法を学ぶ)	(実際に研究する)	(研究成果の表現)
(a)教材との出会い (b)研究問題の発見 (c)調べ問題の構成と研究方法の話し合い (d)研究計画の立案	(a)調べ方の方法を学ぶ (b)知的な問題の解決方法を学ぶ (c)実践的な問題の解決方法を学ぶ	(a)調べ問題の調査 (b)調査結果の表現・発表 (c)知的な問題の解決 (d)実践的な問題の解決	(a)研究成果の総合的な表現活動 (b)自己評価・相互評価 (c)他教材への発展・応用と新たな問題の発見

換・発展することができるようにすることが必要である。

学習活動としては、調査・研究活動、意思決定活動、自己評価・相互評価活動、体験・追体験活動、プロジェクト活動、表現活動など、変化する社会の現実や課題と対面し、積極的にかかわっていく、新しいコミュニケーション手段を活用した活動や社会参加型の活動の開発が必要となる。また、授業過程に応じた学習活動の工夫も必要となる。例えば、導入部での教材と出会い研究問題を発見するための見学・調査活動、体験的活動、資料の活用を中心にした活動、比較活動、展開部での研究方法を学ぶための活動や実際に調査・研究する活動、終結部での研究の成果をまとめる総合的な表現活動や自己評価・相互評価の活動などである。

## 5 おわりに

本小論では、21世紀の学校教育における社会科の役割を、社会の変化や課題に対して学習者一人一人が社会的な判断を行い、合理的な社会的行為を選択・決定できるようになるために必要な社会的な見方・考え方を育成することであるととらえ、20世紀の主要な社会科授業論の何を継承し、それらをどのように革新していくことが必要となるのかについて考察を行ってきた。そして、その革新の方向性として、「社会的課題の研究学習」という考え方を提案した。

今後は、このような授業論に基づく具体的な研究単元を開発していくことによって、これからの社会を生きる市民（公民）に求められる社会的な見方・考え方を育成する授業論の吟味・修正を行っていききたい。

## 【註】

- 1) 主要な社会科授業論の考察にあたっては、次の文献を参考にした。森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書、1978。伊東亮三・池野範男・吉川幸男「社会科授業理論の認識論的基礎づけⅠ～Ⅲ」『日本教科教育学会誌』第8巻、第1号、1983。拙稿「学習の主体性」全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第35集、

1988。社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書、1994。

- 2) 文部省『小学校指導書社会編』学校図書、1989、p.6。
- 3) 文部省『小学校学習指導要領（試案）社会科編』日本書籍、1951、pp.2-3。
- 4) 同上書、pp.16-17、pp.22-23。
- 5) 森分孝治「現代アメリカ社会科カリキュラム研究の示唆するもの」『社会科教育学研究』第2集、明治図書、1976、同『社会科授業構成の理論と方法』明治図書、1978、金子邦秀『アメリカ新社会科の研究』風間書房、1996、参照。
- 6) 拙稿『初期社会科授業論の展開』風間書房、1998、参照。
- 7) 拙稿「小学校社会科における市民的資質育成の理論と授業構成－B.G.マシャラス、T.カルトソーニス、J.L.バースの場合－」『高知大学教育学部研究報告』第1部、第35号、1983、同「意思決定力を育成する歴史授業構成」広島史学研究会『史学研究』第177号、1987、同「社会科における意思決定」『社会科教育学ハンドブック』前掲書、今谷順重『新しい問題解決学習の授業展開』ぎょうせい、1990、吉村功太郎「合意形成能力の育成をめざす社会科授業」全国社会科教育学会『社会科研究』第45号、1996、など参照。
- 8) 学級集団の相互作用を重視した学習の考え方については、佐藤公治『認知心理学からみた読みの世界－対話と協同的学習をめざして－』北大路書房、1996、参照。